

丙午紀行 入

160  
94

160-94



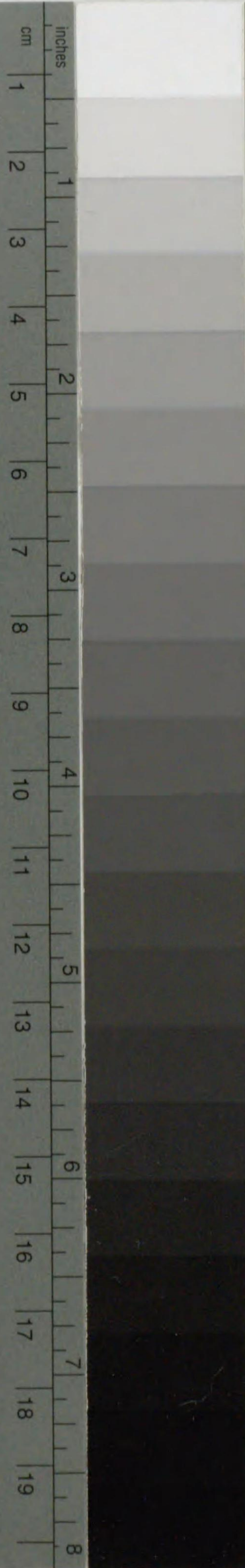
\*1200901383599\*

# Kodak Gray Scale



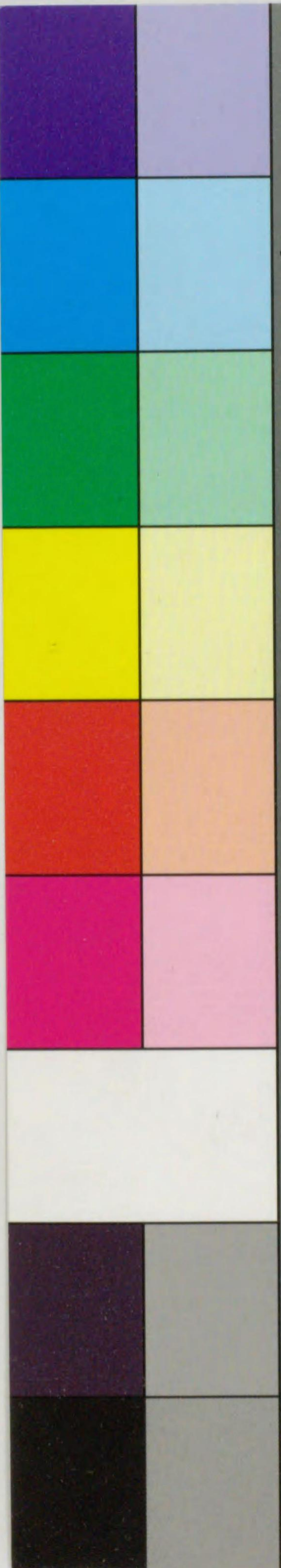
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

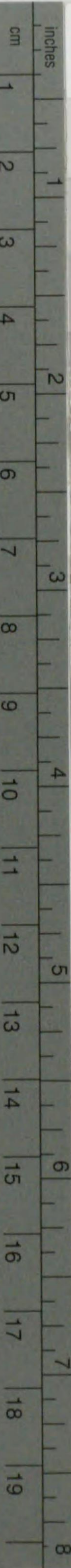


# Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak

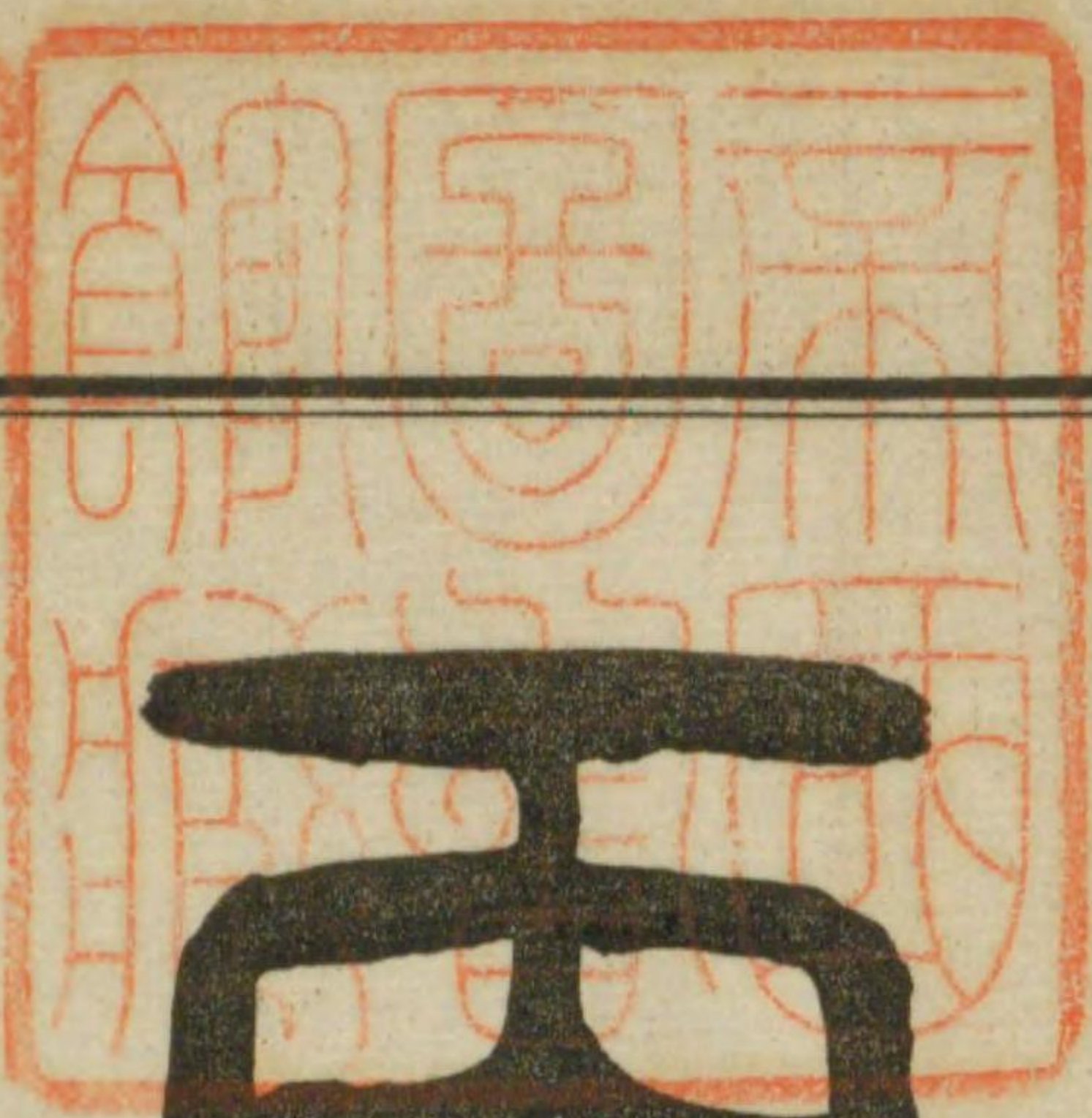




丙午紀行  
人



160-94



丙午紀行

竹山隸古

大正  
11. 12. 15  
内交

二九	二頁	丙午紀行(人)正誤
五	四行	
惟	ふむかし、 誤	
堆	ふ、むかし 正	



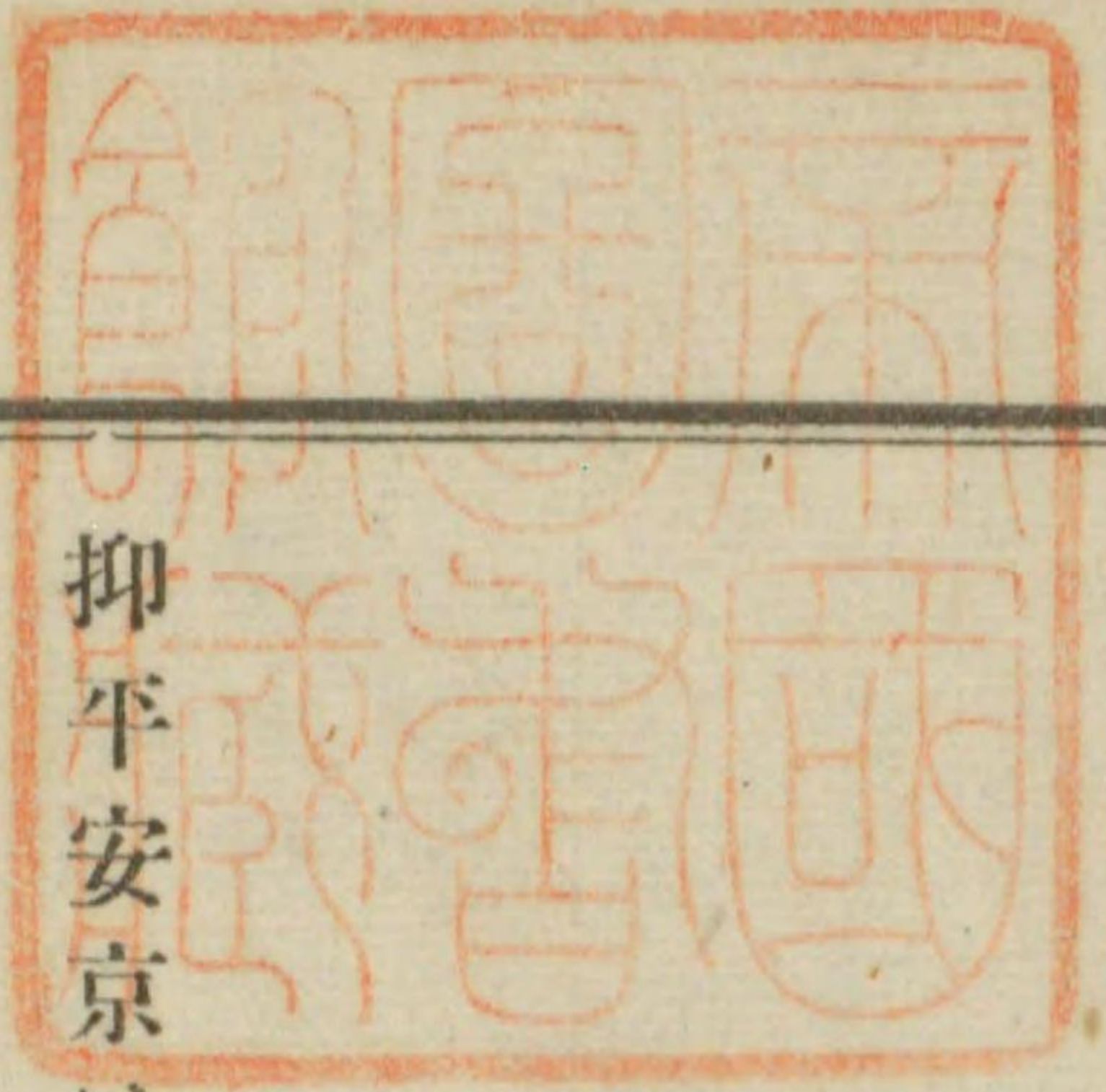
丙午紀行附録

(東海道名所古跡略記)

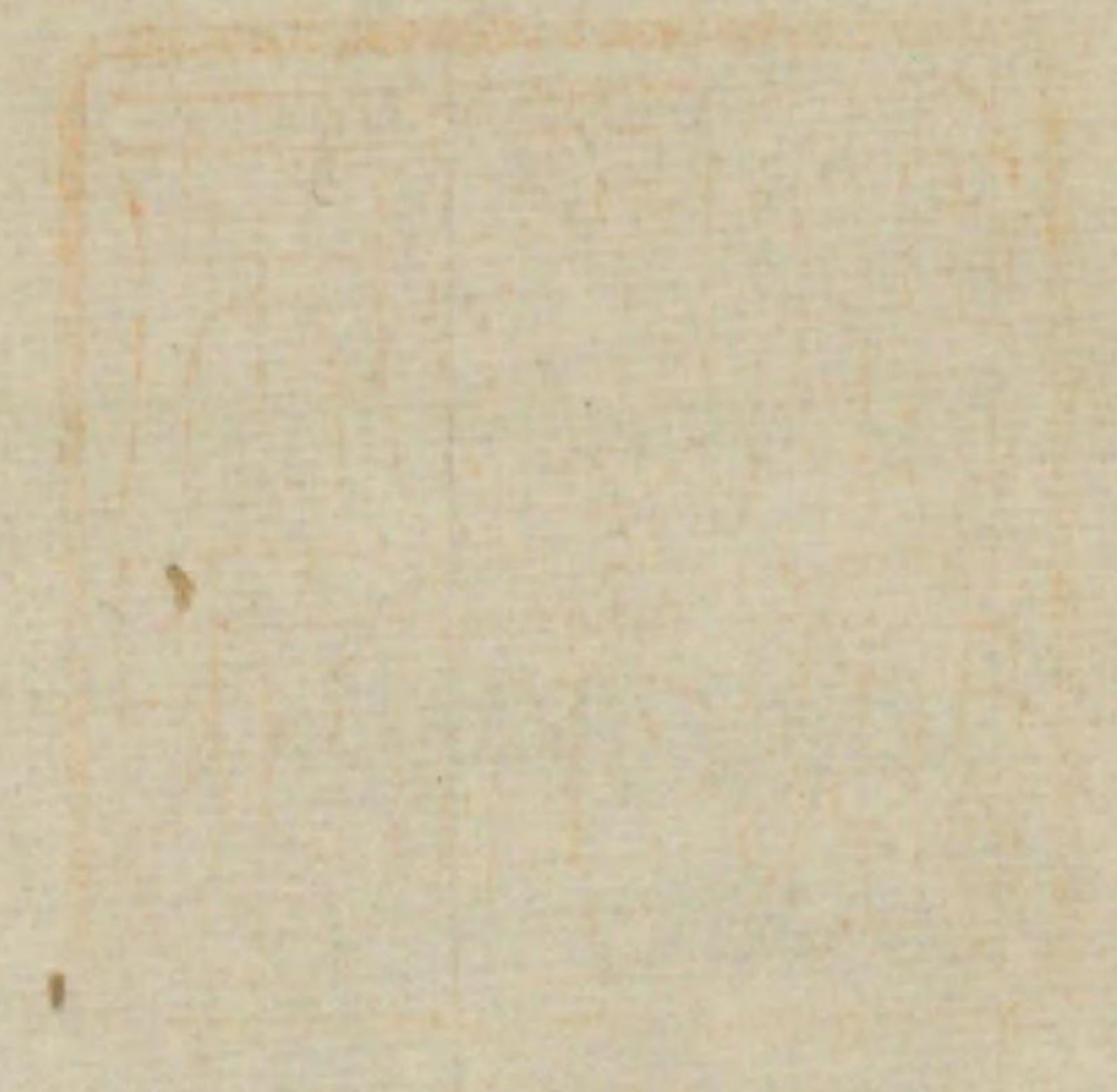
陸奥 桃園 佐藤脩亮 著

嫡孫 佐藤 密校

人



抑平安京は、一千餘年の都にて中華にも其例あらん、畿内七道は  
天武帝の御時、勅によつて定められ、其中にも東海道其冠たり、○  
も草薙の餘光、晃々として、四海の湖は東日に照されて、浪の音穩  
なり、干戈の威、日々に新にして、梟鳥敢て翔らず、賞罰嚴にして、江  
府迄の往來貴賤となく、老幼となく、夜となく、晝となく、公卿は勅





を蒙りて春の御使、藩屏の諸侯は、かはるゝ参勤或は商交易斗、藪の桑門、風騷の歌枕、俳諧の行脚、伊勢参り、富士詣、驛路の鈴の絶間なく馬あり竹輿あり舟あり橋あり、泊りゝは自在にして酒旗所々に翻翻たり、馬に鈴を附るを驛路の鈴といふむかし、毎年貢を馬にて納め奉る時、又は公卿國の任有守護に下り給ふ時、此鈴を付けたる馬は夜も關の戸を明て通したるなり。

衣笠内大臣

○旅人の山路をはふる夕霧に

むまやの鈴の音ひゝくなり

爲家卿

○道細き里の驛の鈴鹿山

ふりはへ過る友よそふなり

道遙院

○神もさそふりくる雨はしの塚の

むまやの鈴の小夜深き聲

國王七鈴を以て、七道へ遣すたには、官使、一つつゝ賜ふ、是を印にしてむまやへつくことにふりならし宿る、其所を驛路といふ、驛舎は京師より五十三驛なり、洛陽散業坊三條橋は、東海道の喉口にして行程も是よりかさひ始る、木の間に神社佛閣列り、花洛の勝景こゝにとまると、橋下の流れは水上に鴨皇太神宮ましますにより鴨川といふ、名産硯石水乾すして墨色に艶あり、五月の頃は日に百魚を漁て調貢し奉る至て美味、良には台嶺巍然として王城の鬼門を守り悪魔を拂ふ、麓に赤山御蔭の社一條寺の降り松、石川丈山詩仙堂、白川の瀧、如意の嶽、淨土寺山の



文字、月待山の麓には銀閣寺あり、神樂岡吉田の社は神祇官にし  
て日本の神々を鎮め祭る、其南に眞如堂、黒谷西に百萬遍、東に永  
觀堂、或は鹿谷談合谷、松虫鈴虫の古墳、光靈寺若王寺五山の上の  
南禪寺、山腹に駒ヶ瀧山峰を獨秀峰と云ふ、三條橋上より南を眺  
むれば華頂山智恩院、圓山の山亭には四時花たへす、蹴鞠の杵音、  
糸竹の宴會、此院々にて遊興を促す、長樂寺東大谷、双林寺の西行  
庵、大雅か跡、祇園女御の祠跡、祇園の社、二軒茶屋、赤蔽膝、翻々とし  
て、豆腐切る音、丁々たり、下河原の醉歌の聲、祇園町の待宵、雲の霄  
つら花の顔露打の作り花、香煎の匂ふ筒井筒、いつくも共に秋な  
らぬ紅葉の色の小町紅、清風まねく奇麗扇、九ツ十のうない乙女  
の拍子よくどんどんとんと、手まり歌、春は曙、夏は夜、四條河原の  
夕涼み、蟬の羽薫る染帷子、雪の肌をわれや一力、見の見ゆる蟲負

組芝居は早雲花矢倉、繩手に雨止地藏尊、建仁寺の陀羅尼の鐘六  
波羅蜜寺の寺向ひ、鐘六道能化の南無地藏、安井の金比羅蛙か池、  
蘭溪菊水午王の社、寺は棒のはし柱、七觀音に伽羅の像、八坂の庚  
申八坂塔、高臺寺の姥櫻、幽艶たり萩の花、靈山の樓閣より洛陽の  
萬戸鮮なり、鳥部山大谷三蜜坂經書堂、仲光寺子安の觀音、車舎馬  
止め、是より清水寺に至る、地主の櫻音羽の瀧、梟の水景清か爪形  
南の方を歌の中山清閑寺といふ、九重の丹楓、要石豊國山阿彌陀  
峰、繼信忠信の石塔、三島社、東を小松谷と云ふ、法然上人の舊跡の  
寺あり、是より苦津滅地流谷とて山科過て、大津へ出る往還、大  
佛殿は天正年中豊臣秀吉公の御建立にして、盧舍那佛を安置し、  
樓門仁王の大像内には金色の高麗狗あり、昔豊臣の社に有しと  
そ又、南に石塔、婆あり、世俗秀吉公の古墳と云傳ふ、大鐘は廻廊の



外にあり、三十三間堂を蓮花天院といふ、一千躰の観音を安置す、堂前に夜泣の池の面の燕子花濃紫の色うるはしく、此處の美觀之、後堂にて大箭數あり諸侯の家臣茲に來りて射術をためす、東に妙法院親王の御殿有り、日吉社智積院養徳院、池田町には梵論々々の寺あり、明暗寺と云其南の柿園は松永貞徳居士の遺跡之、新熊野觀音泉涌寺に涌泉あり又佛牙の舍利世に高し、帝王皇妃の御陵も當山にあり、東福寺藤原氏の菩提所にして開基聖一國師五山の其一之、初は地名を月輪と號す、九條關白兼實公の山莊之、此故に月輪殿下と號す、大相國光明峯寺道實公禪法歸し給へ、此地を聖一國師に附し南都東大寺興福寺を合せて東福寺と號す、通天橋の紅葉は蜀錦の如し、兆殿司虎關の兩僧も此寺に住し、思園池の龍圓柏の唐木等名所多し、三ツの峰稻荷社は元明帝

和銅四年二月初午日出現し給ふ、延喜八年贈大政大臣藤原時平公三峰の社を修造す、永亨十年社を山下に今の地に移す、南に深草山寶塔寺石峰寺の五百羅漢の石像、極樂寺の舊跡、照宣公の古墳あり、元政法師の住所伏見の桃山、大和大路を北へ登れば五條橋河原院の古跡、籬ヶ島籬ヶ森兩本願寺佛光寺の躰まで三條の橋上より一眼にさへきりて平安京の佳景なり。

◎小朝拜

俊頼朝臣

○庭もせに引つらなれる諸人の

立居るけふや千世の初春

つれく草云吳竹はほそく河竹は葉ひろし、御溝に近きは河竹仁壽殿の方によりて植られたるは吳竹之



後 京 極

○むらさきの雲の春風長閑にて

花にかすめる雲の上かな

光廣卿曙記云延喜の御事をこそ又なき例にも申めれと、それもはしく、は匈奴淺りたるよし古き文にも見へたり、今關のひかし戸さしわすれて、天ヶ下卓錐(?)の地も穩ならずと云ふ事なし。

◎關寺小町蹟

壯襄記曰、三皇五帝の妃も漢王周公の妻も、いまた此驕をなさず、衣には錦繡をかさね口には海陸の珍味をとゝのへ、身には蘭麝をかほらし、常に和歌を詠して萬の男の賤くのみ思ひくらし、女御更衣に心をかけたりし程に、十九にて父におくれ、廿一にて兄に別れ、廿三にて弟を先たてしかは、單孤無縁の獨人となりてた

のむかたもなかりき、いみしかりつるさへ日毎に衰へ花やかなりしも顔年々にすたれつゝ心をかけたるたくひも疎くのみなりしかは、家は破れて月のみむなしくすみ、庭は荒て蓬生いたつらにしけるまでになりければ、文屋康秀三河椽になりて下りけるにさそはれて

○わひぬれは身をうき草のねをたへて

さそふ水あらはいなんとそ思ふ

とよみて次第に、をちふれゆく程に、果には野山にさすらへける、人間の有様これにて知るへし。

◎園城寺

長閑の山櫻は入相の鐘にさそはれ、にほてる秋の日は、さゝ波にたゝへ、星霜累れは騷擾の愁なきにしもあらず、治承には源三位



に荷擔し平家の暴逆に伽藍を○せられ、行尊はあさちヶ原に鶉  
なくらんと述懐を詠し、天地老て山河あらたにて、龍虎争ふて草  
木醒し、漸右大將頼朝卿に當山より牒狀を捧じかは平家没官の  
地を寄附し給ふ事東鑑に見へたり。

◎崇福廢寺

一名志賀寺又建福寺

定家卿

○仙人の光りたつねし跡やこれ

み雪さへたる志賀の明ほの

むかし志賀寺の上人として、行學勳修の聖才をはしけり、速にかの  
三界の火宅を出て、永く九品の淨刹に生れんと願ひしかは富貴  
の人を見ても、夢の中の快樂と笑ひ、容色の妙なるに逢ふても迷  
ひの前の着想を憐む、雲を隣りの柴の庵しはし計りと住ほとに、

手つから植し庭の松も秋風高く成にけり、ある時上人草居の中  
を立出て、手に一尋の杖をさらへ、眉に八字の霜をたれつゝ、湖水  
静かなるに向て、水想觀をなして心をすまして一人立給ひける  
ところに、京極の御息所志賀の花園の春のけしきを御覽して御  
歸り有りけるか、御車の物見をあけられたるに此上人御目を見  
合まいらせて、おほへす心迷ふてなまし、あうかれにけり、遙に御  
車の跡を見送りてたちたれとも、我思ひはやるかたもなかりけ  
れは、柴の庵に立歸りて本尊にむかひ奉りたれとも、觀音の床の  
上には忘想の化のみ立そひて、稱名の聲の中にはたへかねたる  
大息のみそつかれける、偕もことしなくさむ事もやと、暮山の雲  
をなかむれは、いとこも心もうき迷ひ、閑窓の月に嘯けは、忘れぬ思  
ひ猶深し、今生の妄念つゝに離れずは後世の障りと成りぬへけ



れは、我思ひの深き色を御息所に申て心やすく臨終をもせはや  
 と思ひて、上人狐裘に鳩の杖をつき、なくなく京極の御息所の御  
 所へ参りて、鞠の○○のかゝりの本に一日一夜そ立たりける、餘  
 の人は皆いかなる修行者こつしき人やらんとあやしむ事もな  
 かりけるに、御息所御簾の内よりはるかに御覽せられて、是はい  
 かさま志賀の花見のかへるさに、目を見あはせしひちりにてや  
 おはすらん、我ゆへにまよは、後世のつみ、誰か身の上にか留る  
 へき、よそなから露斗りの言のはに、なさけかけは、なくさむ心も  
 こそあれと思し見て、上人是へとめされければ、わなくふるひ  
 て中門の翠簾の前にひさまつひて申出たる事もなく、さめく  
 と泣き給ひける、御息所は偽りならぬ氣色の程あはれにも又お  
 そろしくおほしめされければ、雪の如くなる御手を翠簾の内よ

り少しさし出させ給へたるに御手に取つきて

○初春のはつねのけふの玉は、き

手にとるからにゆらく玉の緒

とよまれければ御息女取あへす

○極樂の玉のうてなのはちす葉に

われをいさなへゆらく玉の緒

と遊はされて聖の心をそなくさめ給ひける、道心堅固の聖人苦  
 修練行の尊者たるもとけかたきは發心修行の道なり。

◎唐崎の一ツ松

夫唐崎の靈松は、株の圍り五尋高さ三丈餘、數千の枝葉四方へ繁  
 りて、あるは社頭へなひき、あるは湖上へ秀て、遠く眺むれば翠巒  
 の如く、近く視れば蟠龍に似たり、四時蒼々として君子の操を顯



はし霜雪を凌きて千歳を庸とす、にふてる朝日かけは松の葉こ  
しにかゝやき浦吹く風の夕しくれに、秋しらぬ色を満し、春は霞  
にこめて朧々たるに、沖の舟ちひさく、夏の月のすゝしきに悠々  
たるさゝ波の音、琴の禰初あらしあられふる夜、雪つもる曙みな  
此松の勝景なるへし、されは千歳をふれは其精○○となり、其實  
を嚼へは長生を得、脂は地中に沈んで茯苓となり、又龍骨となる、  
青湖の貢丁固か夢始皇は五大夫に封し、玄井の歸路をしらしむ、  
本朝にも住吉高砂曾根武隈？の名松ありといへとも、此古松第  
一にして又第二にならふものなし、かゝる靈樹の蔭にやとり千  
とせの美とりをうるも又めてたきためしにやあらん。

○志賀の浦や松をあらしの吹しふり  
さゝ波遠く氷る水うみ

烏丸新大納言 光 祖 卿

◎四明嶽

夫四明峰は山州第一の高嶺にして、山水清暉を含み千里に目を  
極む、先つ西南には 帝城の巍然たる粧ひ、鴨川大井の二流愛宕  
高雄の連峰雲端には、淀川の流れ長し、遠く見渡せは難波津の金  
城、其西には滄海洋々として帆かけ舟は昆虫のうこめくに似た  
り、東南の眼下には唐崎の一つ松、大津の浦、粟津の城、勢田の長橋、  
北の方は琵琶湖のさゝ波悠々として山水の美こゝに止る、はる  
かに三上の翠巒比良、膽吹の双峰、黛色深く、沖の島竹生島も浪の  
上にちひさく、今津海津の商船山田矢走のわたし舟は水雲の中  
に鮮なり、會稽の記に四明の高嶺雲に映すと書しも同日の論、此  
峰も四方明の名あり、秋の日雲消し天外蒼々たるときには、駿河



の富士山此峰より見ゆるなり、時世はかはれとも煙霞はかはらす、人物は改れとも風流改らす、我立袖は帝都の繁華琵琶湖の八景、皆目中の客となりて、城は二州の絶勝たるへし、良嶽といふは良は根にして堅し、又卦の名、丑寅の方則一陽來復の後、丑は繫は演て東方孟陬の辰、故に王城の鬼門を守り悪魔を祓ふとは此謂く、世俗鬼門柱といふは此良嶽を云ふなるへし。

◎源氏間

ひかし紫式部石山寺に參籠して源氏物語を作りしところなり

石山記曰、式部は右少辨藤原爲時朝臣の女上東門院の女房にて侍りたるに、一條院の御伯母選子内親王より、めつらしからん物語や有と女院へ申させたりけるを、式部に仰せて作せられければ、此事を祈り申さんとて、當山に七ヶ日こもり待りけるに、湖水はるくくと見わたさせてさまくの風情眼に遮り心にうかみ

けるを取あへず大般若の料紙の内陣にあるを本尊に申うけて思ひあへる風情を書つゝけ玉ふ、此式部は日本紀にくはしければ、日本紀の局と云ならはしける、順徳院御紀云、源氏は第一〇〇〇非人間之所爲不可説之事、第二歌秀逸是又何人及之、我朝之最上也、又花鳥序に曰我國の至寶は源氏物語に過たるはなかるへしと云へり、河海折云八月十五日の夜月湖水にうつりて心の澄わたるまゝに、此物語をわすれぬ先に佛前の大般若に次て明石の兩卷を書初しとそ、夫より次第に書きくはへて權中納言行成卿清書し玉ひ齊院へ參らせけるといふ、天臺六十卷をうかゝひ、一心三觀の妙理を悟り得るといひ傳ふ。

長明無名抄云、さても此源氏作り出たるこそ、思ひは思ひは此世のひとつめつらかにおほゆれ、誠に佛に申乞ひたるしるしにや



とこそおほゆれ、凡夫のしはさこそ覺へぬ事之云々、惟中は續無名抄云源氏は和國の奇筆之、細川玄旨法師の扈從に宮木孝庸と云ひし武士因州の牧に仕玉ふ、若年の時より隨て委曲に傳授して承りぬ、かくの如くの口決ともあり、或時孝庸玄旨法師に、世間のたよりになる書は何をか第一と仕るへきかと尋られければ、源氏物語と答給ひし、又歌學の博覽第一のものはと問ひ給ひは、同源氏と答させ給ふとそ、何もかも源氏にてすみぬる事と承りぬ、源氏を百篇つふさに見たるものは、歌學の成就之と宣ふよし、孝庸はかたりき。

紫式部畫像之讚

有門空門亦有亦空門非有非空門

○こゝろたにいかなる身にかかなふらん

おもひしれともおもひしられす

○誰か世にかなからへて見んかきとめし

あとはきへせんかた見なれとも

右近衛三護院信基公御讚式部影像の畫は狩野古近天臺四勺文を讚となしたる事物語につき深き故ある事にや、河海抄云、式部は檀林院贈僧正の許可を蒙りて天台一心三觀の血脈に入れり、○してより紫野雲林院の幽閑をしめけるとそかたゝゆへあるにや。

◎石亭 栗田郡山田にあり

山田渡口の村中に、木内小繁とて家久しき村翁あり、此人生得若年より和漢の名石を好んで年來諸國よりあつめ、是を翫ふこと數十年に逮へり、住居の軒端風流にして、庭に松櫻をうへさゝめ



なる書院に石〇あり、外雜話を禁ず、席上よりはるかに見はたせは、湖水森茫として比惠の高根唐崎の松眞野堅田志賀の都の跡湖てる沖には山田矢矧の舟片々として皆此亭をもてなすかと思はる、石は神代の勾玉をはしめ、我國諸州の産人の國の産寄石化石天狗の爪、水入の紫水晶迄、あるは臺にかさり、あるは小筭に入て錦を敷て塗籠に家藏する事都て二千餘石ありとそ、所謂普の石鼓をたゝき陶潜か醉石に臥し、李徳か醒石に起て月に日に朝に夕に是を愛す、海内其名高く四方好事の輩貴となく賤となく、こゝに駕を枉て數々の石を觀る事多し。

◎活人石

草津驛駒井氏の家にあり、高さ貳尺餘、幅壹尺五寸、中に少し廣し、色は海松葉の如し、近隣破屋の庭に在りしを近年此化石の銘を、中山亞相公染筆し給ふ、駒井氏一軸として家藏す。

◎ゆるき巖

金瀬村金勝寺にあり、數十人の力を以て動せとも更に動かす、身を淨めてわすか一指を以て押せは忽ちゆるき動くなり。

揮塵錄曰、宋の政和年中靈璧縣より、一巨石を貢く、高さ二丈餘、千夫是をかけとも動かす、或人の曰く是神物也、よろしく表幣すへし、故に題して慶雲萬態と號して金幣を以て、其上にかけ動すに須刻にして苑中に至る、是らの類にや比せん。

◎美松

街道筋本松村山中にあり

美松と號すること、松の葉細く艶ありて四時變せず、蒼々たり、松の高さ小大あり、大樹は根より四五尺迄は株常の如し、夫より枝數十にわかれて近く見れば蓋の如く、遠く眺むれば側拍アキチに似たり、此山中に限りて悉く同木也、隣山は常の松にして美松一株もなし、又他所へ移し或鉢植などにするに程なく枯れて育せず、和漢松の部類を考ふるに、いまた此類を聞かず、遠近こゝに來りて始めて見る人賞嘆せずと云ふことなし、此風土の奇なり。



◎萬里小路藤房卿終焉地 三雲村の南妙感寺村にあり  
 建武二年後醍醐帝へ諫奏ありしかとも、御許容なく終に遁世し  
 給ひ、所々遍歴の事太平記及吉野拾遺に見へたり、老後此山へわ  
 け入帝より賜りし大悲像を本尊とし此寺をいとなみ一首の歌  
 を詠し給ふ。

○世のうさをよそに三雲の奥深く  
 てる月影や山すみの友

かく詠しこゝに錫を止め給ふ事數十年に逮へり、遂に康暦二年  
 三月二十八日遷化し給ふ年八十五歳。

◎筆捨山 坂の下一ノ瀬川の邊にあり  
 里諺云、狩野古法眼東國通行の時、此の山の風景を畫にうつして  
 んやと筆を取るに、心に及はず、山間に筆を捨てしとそ、夫此山は

麓に八十瀬川を帶て蒼松の黛色濃かにして、奇巖所々にならひ  
 て松根是かために曲に撓られて造り木の如し、朝あらしに琴瑟  
 の聲、春夜の雨肅々たり、月の影に龍蛇の影をあらはし、鶴の聲に  
 君子の徳を表はず、葉は秦帝の雨を凌かせ花は宓妃の春に老た  
 り、此山脈つゝきて岩根の東方に大黒石蛭子石觀音岩女夫岩な  
 と形を以て名に呼皆山腹にあり、轉石は街道の左にあり、むかし  
 山峯より爰にころひ落たるとそ、又向ふに當りに錫杖嶽峩々と  
 聳て風色斜ならず、吾妻の通行參宮の貴賤まつこゝに憩ふて時  
 を移す勝地也。

◎名古海唇樓  
 此浦より春夏の間、其形鳳輿行幸羅蓋前後にあり、又諸侯行列の  
 態又は樓臺宮殿の相鮮かに見へて、漁人時に見ることあり、忽ち



須臾にして消々となる、又尾州鳴海の浦杯に春の頃見ゆると、  
諺に云伊勢大神宮の熱田の宮へ神幸あるといふ、又西國北國な  
とももあり、案するに湖水の氣陽精に乗して立昇るゝ陽炎の類  
にやあらん。

◎間遠渡口

桑名七里の渡口をいふ、むかし天武天皇大友皇子におそはれ尾  
濃へ亂をさけ給ふ時、此渡に舟の着岸遅き故、間遠なりと宣ひ、此  
由縁により名によよ、勢尾二州の國境なり、渡口七里の間、風景に  
ならず、西南に朝くま二見の浦、鳥羽の湊、東には三遠の浦々遙に  
見へて、真砂の海路なり。

曙記云、桑名に着ぬ、城のあるし屋形打たるあけのそ〇、舟よそひ  
たてられ、やかてめしうつりぬ、伊勢尾張のあはひの海つらほの  
ほのと霞る月のゑんなるに、なみは、時々白く立てかこの呼聲も  
いかめしく、舟くら〇してうたふ月もやうく入方近くなれば  
人をしつめて

〇はるくと過にしかたの人やあらぬ

波はむかしの伊勢の海つら

光 廣 卿

◎津島渡

貞應海道記曰、七日市驛を立て津島の渡と云所を舟にて下れば  
芦の若水青みわたりて、つなかぬ駒も立はなれず、菅のうき葉に  
浪はかくれとも、雞面蛙はさはく氣もなし、とりこす棹のしつく  
袖にかゝりたれば

〇さして物を思ふとなしにみなれ棹

みなれぬ波に袖はぬらしつ

渡りはつれは、尾張の國にうつりぬ、片岡には朝日のかけうちさ  
して、焼野の草にひはり啼あかり、小笹か原に駒あれて〇しけし



き引かへて見ゆ。

◎豊臣秀吉公出誕古蹟

尾州海東郡上の中村なり佐屋廻り岩塚より二十丁斗り北なり村中に太閤山常泉寺といふ日宗の寺あり。

八月十八日豊太閤薨去の日法筵ありて群集すとなん、又加藤虎之助清正の出生所も此南の隣村下の中村之、氏神は今に於て裔孫より候補ありと之、又淺野蜂須賀其外尾州出生の諸侯此ほとりに古蹟多しと之。

◎呼續濱

宮築出し鳥居崎より關寺村のほとりまでをいふとそ

築出町の西に裁斷橋といふあり、又裁隨橋とも書す、欄干に銘あり、天正十八年六月十二日相州小田原陣中に於て堀尾金(？)助討死せし追福の爲に此橋を架す、慈母哀憐の餘り三十三年供養の儀式或は法名など記せり。

○鳴海かた夕なみ千鳥立かへり

友呼つきの濱になくなり

◎藤原師直公配所

愛知郡戸田村舊跡、龜井山龍泉寺といふ禪刹あり、治承三年十月十五日大政大臣師長公平清盛の爲に左遷せられ給ふ。

◎千鳥塚

芭蕉翁の句碑あり、山王山にあり、南は大洋渺々として南伊勢朝熊嶽野間の内海、あるは三河の伊良子崎まではるかに見へわたりて風景の地なり、當驛千代倉に蕉翁の自畫自讚の墨跡を家藏す。

○禰さめの里松風の里よひつきは

○夜明てからかさ寺は雪のふる

○ほし崎の闇を見よとや鳴千鳥



太田道灌は和歌の達人にして、暮景集を著はさる、ある時出陣せられしに、尾州鳴海の磯邊を通られし時闇の夜なれは潮の満干しれず、軍勢皆躊躇す、その時道灌古歌を吟す

○遠くなり近くなるみの濱千鳥

鳴く音に汐のみちひをそしる

是を諸軍にきかし、千鳥の聲の遠近を聞はけて安々と濱邊に越へる、之らを文武兩道の大将とやいふへき、芭蕉翁の星崎の句も此古歌より出たりと覺ゆ。

◎今川義元塚

有松村と落合村の路傍にあり、此所を屋形狭間或は桶狭間といふ、今川上總介義元戦死の所、古松の下に標石あり、今川上總介

はせを

義元戦死の處と鏑す、明和八年十二月千代倉氏の建る所、猶此邊に古墳多し。

◎八橋古蹟

地鯉鮒より八町斗東の方牛田村の松原に石標あり、是より左へ入事七丁斗りこゝに一惟の丘山ありて、古松六七株、其傍に凹なる池の形の芝生あり、是むかし杜若の有し跡といふ、北の方に遇妻川の流れあり、是に土橋をわたす、是は八ツ橋をわたせし流れといふ、却て此邊田畑にして八橋燕子花の佛もなし、むかしは此處官道にして今も鎌倉道の名ありて道幅も廣し、かの丘山に業平塚といふ石塔婆あり、後來準へ立るものならん。

光行記行云、○して參河國八橋のわたりを見れば、在原業平杜若の歌よみたりけるに、皆人かれ○のうへに涙落しける所よと思



ひ出られて、其あたりを見れともかの草とおほしき物はなくて  
いねのみを多く見ゆる。

○花ゆへにおちしなみたの形見とや

稻葉の露を残しおくらん

貞應海道記云、かくて三河國に至りぬ、雉鯉鮒か馬場を過て數里  
野原を過一番の橋を名つけて八橋といふ、砂に睡る鴛鴦は夏を  
辭し去り、水に立る杜若は時を迎て開たり、花はむかしの色かは  
らす咲ぬらん、橋も同じ橋なれとも幾度か津くりかへつらん、相  
如か世をうらみしは肥馬に乗て昂僊にかへり、幽子身を捨る窮  
鳥にたくゐて當橋をわたる八橋よ八橋よくも手に物思ふ人は  
昔も過ぎや、橋柱よ橋柱よおのれも朽ぬるかむなしく朽ぬるも  
のを今も又すく

○住わひてすくる三河の八橋を

心ゆきても立かへらはや

夫八橋燕子花の名所を賞する事は古今集及ひ伊勢物語より出  
たり、在中將の吾妻下りを此物語に編集す、原此書は古今説々多  
し、世に業平朝臣の自記といひ、或は寛平の官女伊勢の御○御作  
亦は諸冉の尊のことのまきはひより、男女物語といふを伊勢の  
二字に妹背を畧訓して含めり、又清輔の袋艸紙には業平の作れ  
ることを、歌は自他を論せず便りに従ふて同じ人の和歌のやう  
に云つらね、多くは萬葉集の歌を入とそ、一説には齋宮の事を  
詮とするゆへに伊勢と號す、和泉式部か本には齋宮の事を始に  
書りといふ、加茂の眞淵は古歌によりて、行幸の事を書り、これ業  
平歿後の事、服部元喬は在中將の論を著して、其人の風俗と行



事と一ならざる事を論ず、愚按するに、かの卿の風俗を體にして古歌をゑらみ、往昔の談達なる文をつらね、語を嫺婉に基きて後人艶文家の作くと、必しも盡く在氏に出す、或曰、二條家三代集傳授にも初に此物語を讀しむとなり、源氏物語は虚を實に書たり、此物語は實を虚に作り、然るに僻案に虚を實にするゆへに惑説多し、實を實にし、虚を虚に見れば紛るゝ事なし、是伊勢物語を讀口傳く、業平朝臣一期の間の事を書あらはし、夫に古歌を書くわへあるは、上の句下の句杯を取かへたる所は、作物の習ひとしるへし、此段の中に水ゆく川のくもてなれば、橋を八つわたせるによりてなん、八橋と云けるを、眞淵は心せく川と評し、其水を四方の田圃の用水にとて八流水の小川を堀て、是に橋をわたしたり、此ゆへに蜘蛛の如く見ゆると書たり、阿佛尼鎌倉下りの時に

は早廢して橋も杜若もなきと見へたり、然れば年久しき廢跡これと此伊勢物語より出て、杜若の幽艶たるを思ふ、一名顔カホ吉花といふ。

○夏草のおほき中にもかほよ艸

折袖までもむらさきになる

◎淨瑠璃姫墳 西矢矧左の方圃の中にあリ

むかし矢矧の宿の長か娘美艶の女伶なりしか、平家の盛衰を十二段に作り諷ふ、薬師十二神將に比すれば、淨瑠璃御前とよふ、今の淨瑠璃の始り。

◎宮路山 三州寶飯郡赤坂の上方南にあリ

十六夜日記云、山遠き原野を分ゆく、ひるつかたになりて、紅葉いと多き山に向て行、風につれなき所々、くちはにそめかへてけり、



ときは木ともに、立ましりて、青地の錦を見る心地す、人に問へは、  
宮路山といふ。

○しくれけりそむる千入のはては又

紅葉のにしき色かへるまで

此山道はむかし見し心地するにころかはらねは

○まちけりなむかしもこへし宮路山

おなししくれのめぐりあふ世を

山の裾野に、竹の有所にかや屋一つ見ゆる、いかにして何の便り  
にかくてすむらんと見ゆ。

○ぬしや誰山のすそ野に宿しめて

あたりさひしき竹の一むら

◎赤坂

光行記云、宮路山を越すくる程に赤坂といふ宿あり、こゝに有け  
る女ゆへに、大江の定元か家を出けるも哀れ之、人の發心する道  
其縁一にあらねとも、あかぬ別れをおしみし迷ひの心をしもか  
へし、この道におもむきけり、有かたくおほゆ。

○わかれしにしけりにはて、葛のはの

いかてかあらぬかたにかへりし

貞應海道記云、矢矧を立て赤坂の宿を過、むかし此宿の遊君花の  
顔こまやかにして、蘭質の秋芳しき女有りけり、顔を藩安仁か弟  
妹にかりて契りを三列吏の妻妾に結へり、妾は良人に魁して世  
を早し、良人は妾におくれて家を出つ、知らず利生の菩薩の化現  
して夫を導きけるか、又しらす圓通大師の發心して妾をすくへ  
るか、○の善知識大なる因縁之。



○いかにしてうつゝかみちをちきらまし

夢おとろかす君なかりせは

◎二見道

御油より左へわかれて八幡宮をへて本野か原にかゝり豊川に至る是古への街道なり

光行記云、ほむの川原に打出たれば、四方の海かすかにして山なく岡なし、秦田の千里を見わたしたらん心地して草土ともに蒼茫たり、月の夜の乃そみいかならんとゆかしく覺ゆしければ、篠原の中に數多ふみつけ道有て、行末も迷ひぬへきに、故武藏のつかさ鎌倉執權武藏守平泰時道のたよりの輩におほせて、植おかれたる柳もいまた陰とたのまん迄はなけれとも、かつゝまつ道のしるへとなれるもあはれ、もろこしの周公旦は周の武王の弟、成王の三子として燕といふ國をつかさとりき、むかしの西の方をおさめし時ひとつの耳棠のもとをしめて政を行ふ

時つかさ人より始めてもろゝの民に至るまで、其本をうしなはず、普く人の愁をことはり、重き罪をもなためけり、國の民こそりて其徳政をしのふゆへに、周公去にし跡迄もかの木をうやまひてあへてきらす、歌をなん作りけり、後三條天皇東宮にておはしましけるに、學士實政任國に赴く時、國の民にとひ耳棠の詠をなすともわするゝ事なかれ、多くの年の風月を遊ひといふ御製をたまはせたりけるも、此心にや有けん、いみしく忝し、かの前の司も此召公の跡を追てはくゝみ物をあはれむ餘り、道の邊の往還迄も思ひよりて植おかれたる柳なれば、是を見ん輩皆かの周公を忍ひけん、國の民の如くにおしみそたてゝ、行末の影を願ん事、其本意はさためたかはしとこそおほゆれ。

○栽置しぬしなき跡の柳はら



なを其影を人やたのまん

よかはといふ宿の前を打過るに、ある者のいふを聞は、此道はむかしよりよくるかたなかりし程に近き頃、俄かにわたふつの今道といふ方に旅人多くかゝるあいた、今は其宿は人の家居をさへ外にうつすなとそふるきをすて、あたらしきにつくならひ、定れる事と云なから、いかなるゆへならんと覺束なし、昔よりすみつきたる里人は今さらもうかれんこそ、かの伏見乃里ならねともあれまくおしく覺ゆれ。

○おほつかなよかはの川のかはる瀬を

いかなる人のわたりそめけん

◎山本勘助故居 寶飯郡小坂井の東牛久保村にあり、今第跡田圃となる、牛久保の長谷寺に勘助の守佛摩利支天の小像を安置す。

◎煙巖山鳳來寺勝岳院 三州設樂郡門谷村の山頭にあり、天臺眞言の二派に分る。

◎猿か馬場 堺川より東左右原山にして、小松多し風景の地也、北の方に大岩あり、高さ十丈餘、巾二十丈、斗猿か馬場の茶店に柏餅を名物とす。

夜はほのくと明るに、吉田を立てしはらく行て、二川の町を出て海道の松蔭を行く、遠望せしに東の北によりて富士の山いとしろく雲のやうに、さすか山容しるく見ゆる嬉しくおとろかれ

○白妙の雪はかすまてうちなひく

雲ならぬふしの雲にうかへる

◎汐見坂 白菅の東の坂路をいふ、眼下に滄海を見れば潮見坂の名あり、所謂遠州七十五里の大灘、沖に漕つれる漁舟は雲の浪に見へかくれ、浪の鶴浦は千鳥皆此潮見坂の眺望なるへし。

◎富士見松 潮見坂にあり、はれわたる空には、松の木の間より鮮に見ゆる。

◎高師山 白菅より續て北迄の間を云、海邊の眺望、旅中の奇觀なり。

東關記行云、三河遠江の堺に高師山と聞ゆる有り、山中に越かゝ



る程に谷川の流れ落て岩瀬の波ことくく聞ゆ、堺川といふ。

○岩つたひ駒うちわたす谷川の

音も高師の山に來にけり

十六夜日記云、たかしの山もこへつ、海見ゆる程いとおもしろし、浦風あれて松のひきすこく浪いと高し。

○わかためや波も高しの濱ならん

袖のみなどの風はやすます

◎橋本 白菅より一里斗り東なり、むかしは宿驛なり。

◎濱名橋

十六夜日記云、濱名の橋より見わたせは、かもめといふ鳥、いとおふく、飛ちかひて、水のそこへも入る、岩の上にも居たり。

○かもめゐるすさきの岩もよそならず

波のかけこそ袖に見なれて

光行記云、橋本といふ所につきぬれば、聞わたりしかひありて景色いと心すこし、南には海湖あり、漁舟波にうかふ、北には湖水あり、人家岸につらなれり、其間淵崎とふくさし出て、松きひしくおひつゝき、嵐しむせふ松のひき波の音いつれも聞はきかたし、行人心をいたましめとまるたくひゆめをさますと云事なし、水海にわたせる橋を濱名となつく、古き名所、朝たつ雲の名残、いつくよりも心ほそく。

○行とまる旅ねはいつもかはらねと  
わきて濱名の橋そすきうき

◎源太山 荒井にあり

◎濱名湖



とほつうみは、いとみしく、荒き波高くして入江のいたつらなる淵ともこと物もなく、松原しける中より波のよせかゝるも色々の玉のやうに見へていみしくもおもしろし、それよりかみはゐのはなといふ坂のえもいはす、わひしきを登りぬれば、三河の國高しの濱といふ。

貞應海道記云、橋本をたつ橋のわたり行くたり、かへりみれば跡にしら浪の聲はすくる名残を呼かへし、青松の枝はあゆむもすそを引とゝむ、北をかへりみれば湖上はるかにうかんで、波のしは水の顔に老たり、西をのそめは湖海ひろくはひこりて、雲のうきはし風のたくみにわたす水郷のけしきはかれもこれも同じしけれとも湖海の淡鹹は氣味ことなり。

○高師山こへ來て見れば濱松の

一すし遠き浦の入うみ

◎今切

一後土御門院御宇、明應八年六月十日大地震して、湖と湖との間切て海とひとつになりて入海となる、是を今切といふ。

丙辰記行云、遠州濱井の濱より奥の山五里斗り海となりて、大船も出入出入てむかしは山につゝきたる陸地なりしか、中頃山よりほらの貝おひたゝしくぬけ出て海へ入ける、其跡かくの如く海となりて、今切と名付るよし古老云つたへたり、我國は伊弉諾伊弉册の産給へ、大己貴少名彦名のつくられけるといへは、其むかしいかゝ侍りけん、もろこしの華山を巨靈か擘開して水をやりける事も侍るにや。

◎舞坂

光行記曰、舞坂のはらと云所にきにけり、北南はへうくとしてはるかに、西は海の渚近し、錦花繡草のたくひはいとも見へず、白



き砂のみ有て雪のつもれるに似たり、其間松たえく生わたりて、鹽風梢におとつれ又あやしの草の庵所々に見ゆる、漁人釣客などのすみかにやあるらん、未遠き野原なれば、つくくとなかめゆく程に、うちつれたる旅人かたるを聞は、いつの頃よりかはしらす此原に木像の観音おはします御堂なと朽あれにけるにや、かりそめなる草の庵のうちに雨露たまらす年月を送る程に、一とせのそむ事有て鎌倉へ下る筑紫人有けり、此観音の御前に参りたりけるか、若此本意とけて古郷へむかはし御堂を造るへきよし心の中に申置たりける、鎌倉にてのそむ事かなひけるに、より御堂を造りけるより人多く参りなんとそいふなる、聞あへす其御堂へ参りたれば、不斷香のほひ風にさそひてうちかほり、あかの花の露もあさやかなり、願書とおほしき物戸帳のひも

に結び付たれば、弘誓の深き事海の如しといへるたのもしくおほへて。

○たのもしないり江に立るみをつくし  
深きしるしの有ときくにも

◎音羽松 海道の南小澤渡村にあり、古松にして地上にたれ又砂に這立延て風流の名木也、野口村のさゝんさの松を兄とし、ここを弟として乙松ともいふ。

◎引馬野 濱松のほとり三方か原の舊名なり、城を引馬城といふ。

十六日記云、こよひひくまの宿といふ所にとまると、此所の大かたの名は濱松といひしたしと云しはかりの人になともすむ所へ、すみこし人のおもかけもさまく思ひ出られて、又めぐりあひてみつる命の程も返すくあわれなり。

○濱松のかはらぬ色をたつねきて



みし人なみにむかしをそ思ふ

足利義教將軍富士記行云、長月六日斗り橋本を立て引馬の宿になりぬ、引馬野は三河の國とこそ思ひ待るに、遠江にはへるはいかなる事にそ、あしの程野わけはへりし虫の音しけし。

○あかなくにわけこそきつれ虫の音の

袖を引馬の野邊の朝つゆ 義教卿

◎三方ヶ原 濱松より乾の方壹里にあり。

◎颯々松 野口村の田圃の中に有り、一株をいへるにはあらず三十本餘生る松林也

◎天龍川

光行記行云、天龍と名付たるわたりあり、川深く流れおそろしくそ見ゆる、秋の水みなきり來りて船の去事速なれば、往還の人たやすく向ひの岸に着かたし、此川のみくへとなるたくひ多かり

きとこそ、かの巫峽の水の流れ思ひよせられていとあやうき心地すれ、しかはあれとも思ふにもたとふへき方なきは、世にふる道のけはしき習ひなり。

○此川の早き流れも世の中の

人の心のたくひとそ見る

◎池田宿

重衡海道下り云、濱名の橋をわたり給ひは、松の梢に風さへて入江に噪く波の音、さらても旅はうきものに、心をつくす夕ま暮池田の宿にも着玉ひぬ、かの宿の長者熊野か女侍従の許に其夜は三位宿せられたり、侍従三位中將殿を見奉りて、日頃は傳へたる思召寄給はぬ人のけふはかゝる所へ入らせ給ふ事不思議さよとて一首の歌を奉る。



○旅のそらはにふの小屋のいふせきに

古里いかに戀しかるらん 熊野侍従

○古里は戀しくもなし旅のそら

都も終のすみかならねは 三位中將

や、有りて中將梶原を召て、扱も只今の歌のぬしはいかなる者  
そやさしくも仕たるものかなと宣へは、景時畏て申けるは、君は  
いまたしろしめし候すや、あれこそ八島大臣殿の未だ當國の守  
にて渡らせ玉へし時めされまいらせて御寵愛候へしに、老母古  
里にて痛はりあれは都より御暇を申上しかとも給らされは、頃  
は彌生の始めにや有けん。

○いかにせん都の春もおしけれと  
なれし吾妻の花やちるらん

といふ名歌仕り暇を給はりてまかりくたり候ひし海道一の美  
人とそ申ける、都を出て日數へぬれは彌生の半過て春も既に暮  
なんとする遠山の花は残の雪かと見へて浦々島々霞わたり、越  
方行末の事とも思ひつゝけたまふも、こはいかなる宿業のうた  
てさよと宣ふて、つきせぬものはなみたなり。

◎熊野侍従古跡

池田の宿持取山行奥寺といふ寺熊野か古跡なり。

されは池田の長といへるは今の本陣の宿の如し、仁安の頃此長  
者子なきをなけきて、熊野權現へ詣し祈りければ、一女子を設ふ  
く、其名を熊野と名付三五の年にもなりしかは、其風俗窈窕とし  
て雲髻花顔一生千金の佛も、今はむかしとなりて鬼火さよ、しく  
れに青く枯體朝あらしにされて秋草の墓畔にしける、一とせ遊  
行他阿上人眞教國めぐりの時こゝに泊り、熊野か菩提をとむら



新編 御成敗式目 卷之五

ひ、藤澤流の寺とし是を池田道場とよふものならん。

◎今の浦 見付臺の南をいふ。

光行記行云、今の浦に着す、爰に宿かりて一日二日とまりたる程に、海士の小舟に掉さしつゝ、浦の有さま見めくれは、鹽海の間よりすさき遠くへたたりに、南には柳浦の波袖をうるほし、長松の風心をいたましむ、名残多かりし橋本の宿にそ似たる、きのふのそめそへりなからすは是も心とまらすしもあらさるましなと覺へて

○浪の音も松のあらしも今の浦に  
きのふの里の名残をそきく

◎佐夜中山 日坂東北の方也。

光行記行云、佐夜中山は古今集の歌によこをりふせるとよまれ

たれば、名高き名所とは聞おきたれとも、見るにいよく、心ほそし、北は深山にて松杉あらしはけしく、南は野山にて秋の花つゆしけし、谷より峯にうつる白雲に分入こゝちして鹿音をみたを催し虫の音あはれ深し。

○ふみまよふ峯のかけ橋とたへして

雲に跡とふ佐夜の中山

貞應海道記云、佐夜中山にかゝり此山口をしはらく登れば、左に深谷右も深谷、一峯なかきみちは塘のうへに似たり、兩谷の梢を眼下に見て、群鳥のさへつるを足の下に聞、谷の兩片は高く、又山の間を過れば中山とは見へたり、山はむかしの九折の道ふるきか如し、梢はあらたなるこすゑ千條のみとり皆あさし、此所は其名聞つる所なれば、一時の程に百たひ立とまりてうちなかめゆ



けは、秦蓋の雨はぬれずして耳を洗ひ商弦の風のひゝきは色あらすして身にしむ。

○わけ登る佐夜の中山くるしきも

こえて名残そくるしかりける

◎菊川 菊川村にあり。

承久記云、承久三年七月中御門中納言宗行は小山新左衛門尉具し奉りて下りけるか、遠江の菊川の宿に着給ふ、此所をは何そと問ひ給へは、菊川と申し則前に流るゝかさん候と申ければ、硯乞出て宿の柱に書付給ふ。

昔南陽縣之菊水汲下流、

延齡、

今東海道之菊川宿西岸、

亡命、

光行記云、菊川と云所あり、去にし承久三年の秋の頃、中御門中納言宗行と聞へし人、罪有りて吾妻へ下られけるに、此宿に泊りたりけるか、昔は南陽縣の菊の水下流を汲んで齡をのふ、今は東海道の菊川の西に宿して命を失ふとある家の障子にかゝれたりけると聞置たれば哀れにて其家を尋るに、火のために焼てかの言のはも残らぬよし申者あり、今はの形見とて残し置けん形見さへ跡なくなりけるこそはかなき世のならひといと、哀れにかなしけれ。

○書つくる形見も今はなかりけり

あとは千とせとたれかいひけん

貞應海道記云、胡馬ひつめつかれて、日鳥つはさつかりぬれは、草



命をやしなはんかため菊川の宿にとまりぬある家のはしらに  
故中納言宗行卿かく書付られたりかの南陽縣の菊水下流を汲  
て齡ひをのへ東海道の菊川西岸にやとりて命を全くせん事を  
ことに哀れとこそおほゆれ其身は累葉の賢枝に生れ其官は黄  
門の高き階に昇る雲の上の月の前には冠の光りを交て仙洞の  
花の下には錦の袖の色をあらそふ身たり榮分に餘りて時と花  
と匂ひしかは人それをかさして近きもしたかひ遠きもなひき  
しもかゝる浮め見んとは淺ましや去る承久三年中旬天下風荒  
て海内の浪さへかへりき鬪亂の亂將は花城よりみたれ合戦の  
戦士は○國より戦ふ暴雷雲をひゝかして日月光りをおほはれ  
軍○地をうこかして弓鉞威をふるふ。

○心あれはさそな哀れと水くきの

あとかきわくる宿の旅人

◎宇津山

夫宇津山蔦細道は勢語に出ていにしへより其名高く古詠多し  
上方よりこゝに至るには岡部の驛より海道壹里斗り行て湯屋  
坂の下と云所ありこゝの鼻取地藏堂の向ふなる熊野權現の社  
の側より右の方へ入るゑ是より道細くいさゝめなる谷川あり  
此流れを右に添左につれて疋の橋五つ六つをわたる坂路にか  
ゝれはいよゝ道細く山深ふして幽寂たり茅すゝき荻篠竹生  
茂りて藤蔓蘿かつら足にまとひ薔薇荆棘にたもとを閉て歩し  
かたく二人の手引の者鎌をもて叢をかりて次第に登るに路峨  
しく杖を力に行に少したいらなる所ありこゝを神社平といふ  
むかし社有し古跡なりと教ゆ按するに駿河風土記に宇津の谷



本原神社は仁徳天皇紀七年乙卯祭る所之と云云、若此神社の古跡ならんか古歌に

○をとに聞宇津の社のうつゝにも

夢にも見へぬ人の戀しさ

其上の方に猫石といふ有り、古松六七株の陰に猫の臥たる形に似たる巨巖あり、夫より又登るに漸頂嶺とおほしき所に出たり、山廓依々として伐木の音さへかすかにたも聞へず、實に陶潛か桃花源に至るの梯あり、是より東に下る坂路いよゝゝ峻しく、且眞砂地にして踏止かたくすへりなやみて靜かに下る、少しき道ある所へ出れば又溪川あり、こゝにも虹の橋あり、路も鮮にして段々下るに、遂に宇津の谷嶺の東なる十團子の名物の茶店の傍たいら橋といふ圪橋の東爪に出たり、是東海道之初の湯屋口よ

り此所迄道法一里にたらず是を蔦の細道といふ。

貞應海道記云、岡部の里を過てはるかにゆけは、宇津の山にかゝる、此山は山中に山を愛する巧のけつりなせる山、碧岸下に砂なからして巖をたて、翠嶺の上に葉落て壤をつく、肱を背に面を胸にいたきて漸に登れば、汗肩祖の膚に流れて單衣かさぬといへとも懐中の扇を動かして微風の扶持可く、斯くて森々たる林をわけて峨々たる峯を越れば、○○のほまれは此山に高し、大かたをちこちの木立に心みたれて過れば朝雲峯くらし、虎李將軍か栖を去り草風谷寒し、鶴鄭大尉か跡にすむ、既にして赤羽西に飛眼に遮るものとは檜原楨の葉老のちからこゝに疲れたり、足にまかするものはこけの岩根、勤の下道嶮難にたへず、しはらくうち休めて修行者一兩客繩床そはたて、休む。



○立かへり宇津の山ふしことつてよ

都こひつゝひとりこへきと

行くく思ひはすきぬる此間の山河は、夢に見つるかうつゝに見つるか、きのふとやいはんけふとやいはん、むかしを今と思ひは我身老たり、今をむかしと思ひは我心わかし、古今をへたつるものは我心の中懐く、生死涅槃猶如昨夢といへるも哀れとこそおほゆれ、きのふ過にし跡はけふの夢となり、今日此處を過る明日いつれの處にして、今は昨日といはん、誠に是過ぬるかたの歲月を夢より夢にうつりぬ、昨日今日の山路は雲より雲にゐる。

○あすや又きのふの雲におとろかん

けふはうつゝの宇津の山こそ

◎梶原景時墳

狐崎の東岩原の左の方梶原山にあり。

光行記行云、うち過る程にある木蔭に石を高く積上て目にたつさまなる塚あり、人に尋れば梶原か墓となん答ふ、道のかたはらの土となりけりと見ゆるにも顯基中納言の口すさみ給へりけん、年々に春の草老たりといへる詩思ひ出られて、是又古き塚となりなは名たにも残らしと哀れく、○大傳かあとにはあらねと、心有人はこゝにも泪をや落すらん、かの梶原は將軍二代の國にほこり、武勇三畧の名を得たり、側に人なくそ見へけるか、いかなる事にか有けん、かたへのいきとほり深くして忽に身を亡すへきになりければ、ひと間とも延んとや思ひけん、都の方へはせ登りける程に、駿河國告川と云ふ所にて討れにけりと聞しかは、さはこゝに有けりと哀れに思ひ合されける、讚岐法皇廢所へ趣かせ給ひて白峰といふ處にて崩しさせまし、ける御跡を



西行修行のついでに見まいらせて。

○よしや君むかしの玉の床とても

かゝらん後は何にかはせん

とよめりけるなと承るに、まして下さまのものゝ事は申すに及はねとも、さしあたりて見るにはいとあはれに覺ゆ。

○哀れにも空にうかれし玉鉾の

道の邊にしも名をとゝめけり

◎清見關

村老曰、清見寺の門前也と。

貞應海道記、清見か關を見れば、西南は天と海と高低ひとつに眼をまとはし、東北は山と磯と峻難同しく、是をつまたつ磐の下には波の花風にひらく春の定めなく、峰の上には松の色みとりをふくみ秋をおそれず、滔天の浪は雲を汀にて月のみふね夜出て

漕沈め、陸の磯は磐を道にて風の狭脚あしたに吹てすく名を得たる所必しも興を得ず、耳に沈る所必しも目にふけらす、耳目の感二つなから得るは此浦に有り、浪に洗ひてぬれく、道をとひは、松風むなしくこたふ、柳岸にくるしみを尋ねて、槿花變して石あり、關屋の邊に布たゝみと云所あり、むかし關寺の布を取たるか積りて石にふりたりと聞ゆ。

○吹よせよ清見うら風わすれ貝

ひろふ名殘のなにしおはゝや

◎興津川

十六夜日記、興津の濱に打出つなく、跡の月かけなとまつ思ひ出らる、ひる立入たるところにあやし御けの枕あり、いとくるしけれはうちふしたるに硯と見ゆれば枕の障子にふしな



らかきつけつ。

○なをさりにもみるめはかりをかり枕

むすひおきつと人にかたるな

◎岫崎

興津川をわたりて薩陞山の海岸をいふ。

貞應海道記、岫崎と云所は、風飄々とひるかへりて砂をまはし波浪々とみたれて人をしきる、行客こゝにたつさはりてしはらくよせ引浪間をうかかひて急き通る、左りは嶮岩の下に岩のはさまをしのきゆく、右は幽なる浪のうへをのそめは眼うけぬへし、はるくとゆく程に大和田浦にきたりて、小舟の沖中にたよひるを見る、飄帆飛て萬里風便をたのみて白煙に入籠波うこきて千雲夕陽をあらひて○藍にそむ、海館のうち此所をのみとめて身をはととめす。

○わすれしの波の面影立そひて

すくる名残の大和田のうら

◎富士川

貞應海道記、蒲原を立てはるかに行は前路に先たつ賓は馬に水かひ後河にさかりぬ、行程にさかりくるおのれは野に草しきてこぬ人をさきにやる、先後のあはれは行旅の習にも思ひしられて打すくる程に富士川をわたりぬ、此河中にてそ石を流す巫峽の水のみなんそ舟をくつかへさんや、人の心は此水よりもさかしければ、老馬をたのみて打渡る、老馬く、汝は智有りければ山路の雪のみにあらず、川の底の水の心もよく知りけり。

○音に聞し名高き山のわたりとて

底さへ深し富士川の水



◎曾我兄弟禿倉

富士川の東〇〇の左りの山際〇〇と云ふ所にある。

去人曾我八幡といふ、今も敵討の者信するに、靈應ありといふ、其側久津と云所に泉福寺といふ寺あり、曾我兄弟の石塔あり、苔深く文字剥落して見へず、寺に牌あり十郎祐成を高崇院殿峯巖良雪といひ、五郎時致を鷹岳院殿士山良富と見へたり。

◎富士山

夫富士を芙蓉と名付る事は、八ツの峯八ツの谷ありて其體は八葉の蓮花に似たり、不二は都氏の宣ふ(？)郡の名によりて之、山は〇にして萬物を生る謂之、麓は駿甲相の三國に跨りて、嶺は十五州の壯觀とて青天忽見素羅笠羅笠擔中十五列と惺窩先生も詠し玉ひ、又石川丈山も雪如紈素煙如柄白扇倒懸東海天とも賦し、京師の四明大和の金峯よりも見ゆる、尙も肥の崎陽より百里斗

り漕出て大洋より富士峰見へて、外夷の船我國へ渡海の的とすとそ聞ゆ、むかし孝安帝九十二年此山始て現すとも又孝靈帝五年近州琵琶湖と共に一夜に現すとも云つたへり、或説には大むかし此山雲霧深くしていまた現れず、人民も少くして尋〇とる事なし、孝靈の御時初めて霧はれ見顯しけるとそ、是らも都氏の記にみへされは正説にあらず、本朝の高嶺にして絶頂まで九里餘直立の高さを積れば都て一千五百丈にして北斗に近し、峰の形貌妙にして業平も鹽尻に似たりと云ひ、夏天に雪を戴て萬葉に詠す、巔は平原にして其中を呵澤とて凹にして甌の如し、底に池あり今は水涸れてなし、虎石とて虎の躰に似たる石あり、こゝにては夜陰に旭をかゝやかし、日の出には三尊佛を期すとかや、はるかに東北を見下せば、海面幽にして鳥嶼浪にふす鷗のこと



し、西南は雲霧朦朧として水やそらとも見へわかす、山路は三ツの街ありて是より登り千筋にわかる、裾野は長くして百里にっらなる、尾の富士見原遠の鹽見坂までは山の形相同し、三穗清見神原よりは良に當りて嵯峨たり、原吉原は正面にして裾野まで鮮かにして山趾東西に長し、三島箱根よりは伏龍の形に見へて鎌倉よりは北の方へ甚延たり、武藏野よりは西南にあたりて江府の赤坂駿河臺よりは乗物の窓に眸を動かし、日本兩國の橋上には馬上の人の首をめくらし、駿河町の名も富士に寄之、延喜式内淺間の神社は此山の神にして、木花開耶姫を祀る、此命は大山祇の御女にして瓊々杵の皇妃木花とは櫻樹に天降り給ふにより、富士に櫻を詠する事此縁なり、三島は大山祇の命なれば云俗御親子とも云なるへし、水無月の禪定は松明を照せる事幾千萬

といふ數をしらす、眞砂は詣人の裾に就て下れば其夜又峰へ登る其音瀧水の如しとて峰に鳴澤の名あり、是は里人いふ富士の御神砂をおしみ玉ふとそ、竹取物語には竹取の翁といふ者ありて、竹を取に行ける時其竹の中に三寸斗りの人あり、いと美しければ養ひ育たるに、譬の間に生長し艶顔なること限りなし、屋の内は光り満々たれば名をかくや姫といふ、風土記には是を鶯姫と稱し、今昔物語にも見へ、詞林採業にも天智天皇かくや姫を戀したまひ、勅使を遣はされければ、不死の薬を献り、天上し玉へける、此ゆへに薬を煙となし富士の名けむりの立登る事こゝに起ると之、天智帝は京師御廟〇より昇天し玉ふとて御杵の止る所に御陵を築て陵村の名今にあり、日本記には大津の宮にて崩し玉ふとあり、或人の曰、實は天皇巡視し玉ふ時薩摩瀉鹿兒島のほ



とりにて崩し玉ふ、今も御陵の其地に有り、と其人の語りきと告る。これ秘藏の事になん、桓武帝陵は京師深草柏原にあり、一千年に逮ふといへとも、其所顯然たり、故に柏原天皇とも申奉りき、源の順の竹取物語を書れしは、莊子に效て窩言之(？)難波の契沖阿闍梨は寶樓閣經によりて著されしと宣ひし之、古雅の名文にして、歌道の標となる、赤人は白妙に譽を取り、俊成卿はなる○にあた名を残し、西行法師は五文字を○か禰、頼朝卿は捲狩に武將の威を耀し、曾我兄弟は俱に天を載さるとして本意を達し、常陸坊は仙境に入仁田忠常は人穴に名高く、役の小角は木履にて歩み上宮大子は驪の駒を馳せ、空海圓珍も登山して石佛を鑄し、除福は秦帝を嗽てこゝに來り、絶頂の○半腹の雀富士松の紅葉不二○草ふじ、黄底ふじ、海苔富士の八湖は倒に影を浸し、甲州の府には

三ツの嶺に見へて古法眼の霞の富士はこゝなるへし、むかしの東海道は富士愛鷹ふたつの山の間を通り、其中に横走關と云あり、愛鷹清見横走是を富士の三關と云、むかしの道を旅人しけく通り、重服觸穢もあれは愛鷹明神深くいとほせ玉ひ、南海の中にゆるれて有ける、嶋を打よせさせ玉ふて今の海道は出來にけり、其寄せられし嶋は浮島か原とて云傳へ待る、抑三國無双の名山と賞し、魏楚六朝及ひ宗學士か日本曲にも○蓬萊山と號する所紀の熊野尾の熱田此山なるへし、それか中にも是上にして眞に我國の仙境梅福九華眞妃も出さるはうらみ多き事なるへし。

◎富士沼 吉原の北にあり。

光行記行、浮島か原はいつくよりもまさりて見ゆ、北は富士の麓にてみとりかけをひたして、空も水もひとつ、芦かり小舟所々



に棹さしてむれたる鳥おほく去り來り、南は海の面遠く見わたされて雲の波煙の浪いとふかき脈なり、すへて孤島のまなこに遮るなし、終に遠帆のそらにつらなるを見る、こなたかなたの眺望いつれもとりに心に心ほそく、はらには鹽屋のけむり絶え絶え立わたりて、浦風松の梢にむせふ、此原むかしは、海の上にかひて蓬萊の三ツの嶋の如くに有けるによつて浮島となん名付けたりと聞にもおのつから神佛のすみかにもやあらんといと、ゆかしく見ゆ。

○影うつす波の入江のふしの根の  
けむりとそらに浮島かはら

◎手兒呼坂

元吉原四ツ屋にあり。

◎要石

一本松村の海邊にあり、海濱の風景妙にして伊豆の岬まで見へわたりて、〇〇天を浮むの勝境なり。

◎原

委は浮島原なるへし原吉原、蒲原是を三原といふ。

貞應海道記云、うき嶋か原を過れば、名は浮島と聞ゆれとまことは海中とは見へず、野經と見つへし、草むらかり木の林あり、遙に過れば人煙片々とたへて又たつ新樹程をへたつ、隣たかひに疎し、東行西行の客は見る知音にあらず、村南村北の道にた、山海を見る。

◎横走關

富士足柄の間にあり古への東海道なり。

◎富士人穴

足柄山の麓に建仁三年六月三日仁田四郎忠常人穴に入りしと人口に膾炙す。

◎千本松原

沼津の驛の南五反田村の海濱の松原をいふ、こゝに六代御前の石塔あり。

光行記行、千本松原と云あり、海のなきさ遠からず、松はるかに生わたりてみとりのかけきはもなし、沖に舟とも行ちかひて、木の葉のうけるやうに見ゆ、かの千株の松のもとの双峰の寺、一葉の



舟の中の萬里の身を作れるに、かれもこれもはつれず、眺望いつくにも勝たり。

○見わたせは千もとの松のすゑ遠く  
みとりにつゝく浪のうへか那

◎車返シ

沼津三枚橋の北の地名也。

貞應記行、車返しと云所を過ぎ、此所もし蠟垠か道にあたりて、行人をとめけるか、又もし遊兒か土城を作りて孔子に答けるか、若又勝母の閭ならば曾子にあらずとも、淮もいか、通らん、嶮岨の地なれば大行路と云つへし。

○むかし誰こゝに車のわつりひて

なかへを北にかけはしめけん

◎富士隠れ

沼津の東黒瀬松原二ツ屋など地形大に低し、愛鷹山にさへきられ、て富士見へす。

◎頼朝義経初對面地

黄瀬川の東長澤(?)村八幡宮の社地也。

◎伊豆三嶋神社

三嶋驛中にあり。

光行記行、伊豆の國府に至りぬれば、三島の社のみしめうち拜み奉るに、松のあらしこくらく、音つれて庭のけしきも神さひわたり、この社は伊豫國三島の大明神をうつし奉ると聞にも、能因入道伊豫守實綱か命によりて、歌よみて奉りけるに、炎旱の天より雨暴にふりてかれたる稻葉も忽ちにみとりにかへりける、あら人神の御なこりなれば、ゆふたすきかけまくもかしこくおほゆ。

○せきかけし苗代水のなかれきて

又あまくたる神そ氏かみ

◎箱根

寂連集、十月はかりに東の方にまかりけるに、箱根といふ山をな



ん越ける所の有様あやしくよの常にかはりけり、遙かに峯に登りては海をわたり、谷に下りては雲をふむ、去程に風に木の葉をまくりあけてしくれの麓より登りければ

○旅のそら雲ふむ峯を越ゆるらん  
しくれは袖の下よりそする

光行記行、猶過る程に、宮はかりなる山の中に至りて、水うみひろくたゝへり、箱根の湖水と名つく、又あしの海と云もあり、權現垂跡のもとひけたかくたふとし、朱樓紫殿雲にかさなれるよそほひ唐宗の驪山宮かとおとろかれ、岩寶石龕の浪にのそめる、かけ錢塘の水心寺とも云つへし、嬉しき便りなれば浮身のゆくへしるへをせさせ玉ひなと祈りて法施奉るつゝみてに。

○今よりは思ひみたれし芦の海の

ふかきめくみを神にまかせて

◎金湯山早雲寺 湯本村にあり北條五代の墳寺内にあり。

◎石橋山 小田原の入口より壹里斗西南に有り海面遡々として風光いちし

◎小餘綾磯 酒匂より大磯迄の磯邊をいふ。

◎鳴之澤

◎花水橋 高麗寺村にあり此邊風景よろし。

◎馬入川 馬入村にあり。

◎雨降山大山寺 京師よりは小田原より入る、江戸よりは藤澤の西四ツ谷より西に入る。

◎兒か淵 江の島龍窟へ下る岸下にあり。

相傳ふむかし建長寺廣徳庵に自休といふ沙門あり、奥州信夫の人なり、或時宿願ありて江の島に詣す、此山中にして美少年に逢ふ、藏主戀慕の思ひ止かたくや有けん、かの伴ふ僕に問へは、鎌倉



の相承院に住玉ふ白菊といふ兒なりと答ふ、夫より人を以てひ  
そかに、思ひのまゝを文に書て求むれとも更に諾する色なし、然  
れとも日に増して思の闇ふかく、いろくくと品をかへて云おく  
れとも随ふけしき見へず、月を累ねて切に聞へければ、白菊情あ  
るものにや有けん、ある夜まきれ出て江の島に行き、扇をわたし  
守にあたへて云やう、我等を尋る人あらは見せよと云て別れぬ、  
其扇に歌あり。

○白菊にしのおの里の人とは、

思ひ入江の嶋とこたへよ

○うき事を思ひ入江の嶋かけに

すつる命はなみの下草

かく二首の辭世して、此淵に身をしつめて終りけり、自休慕ひ來

りて此歌を見て思ひにむせひ一律を賦す

懸崖峻處捨生涯

十有餘霜在剎那

花質紅顔碎岩石

娥眉翠黛接塵沙

衣襟只濕千行淚

扇子空留二首歌

相對無言愁思切

暮鐘爲誰促歸家

○白菊の花のなさけの深き海に

ともに入江の島そうれしき

是らを詠して此淵に共に投死したり、故に兒か淵といふ、白菊ケ



天竺山  
竹  
籬  
行

塚は鎌倉にあり、自休の像は同西御門法花堂にあり。

◎七里濱 腰越より稻村崎迄渚道四十二町東關六丁一里を以て七里濱といふ。

◎鎌倉 鎌倉田境東は六浦西は稻村南は小坪北は山ノ内とす、其中に谷七〇十井十橋七の切通五水の名泉あり。

◎能見堂 金澤稱名寺の西北にあり、擲筆山地藏院と號す。

◎捨筆松 堂前にあり。

諺曰、むかし巨勢金岡此地に來りて、こゝの風景を寫さんとして、筆を取りしに眞妙の美心のまゝならんとて此松の下にて筆を投捨しとて、此堂上より風色の妙なる限なく見ゆるゆへ能見堂の名あり。

附 録

◎加田粟島大明神天兒アマガの由來

今の世に、例年三月三日、九月九日、女子雛祭の遊戯ある事は往古神功皇后手つから少彦名命の御神像を作りて當社に奉納なし給ひしより起れり、其後仁徳天皇の御宇神託によつて、天下婦女の病苦を攘除のため、宇禮豆玖物ウレマクとて雛形を製して是を翫はしめ玉へり、又天兒といへるも少彦名の御神像にして、是をまつる事雛遊の卷に見へたり

○あまかつの教そめにし神こゝろ

あはれとは見よおなし子のため

以上社家の秘説なり。



又或説に少彦名命は、神代より醫藥の祖神にして、禁厭マヒナヒ轉移の法を傳へ給ひり、其法多くは病腦災難すへて轉しうつして免れしむる術マヒナヒ、こゝを以て文德實錄に、天安元年八月在常陸國大洗劑酒列マヒナヒ、萬神〇〇官社云々同年十月此二神號藥師菩薩名神と延喜式神名帳にも出て名神大とあり、此神は則ち大汝命少彦名命二神にてまします、されは命命綱といへるも彼みことの御教にて繩をなひてさまゝにま〇なふ法なるを後世あやまりて幻術家と混ぜり、今の世に人の風ほろしを患るに、左り繩にてこすり其繩を火にもやせは、ばちゝとなりて風疹癒るゝ、是則ち命繩の遺法なりといふ、其ことくにて彼天兒アマノコといへるもすへて己れか身にある災を彼に轉しうつすのまちなひにして、あらたに製して身に着る程の物は、皆先天兒にかつけて是をきせ其餘座

右に置いて、心よからさる事のある時は、天兒を撫さすりて是をうつしまちなふゝ、諸禮家の傳に、婚禮親迎の夜先乗とて副輿に此天兒をのせて新婦の前に行かしむ、もろゝ災あらんには、彼に負はするの心マヒナヒ、されは天子御祈願の事ありて諸社に奉納し玉へるヲナテモノといへるも、此天兒の事なれば、其むかし皇后御不豫の事ありて、此御神へ祈請なし玉ふとき治め玉へる天兒なるへし、夫を後世ひなとなして兒女のもてあそひとするも此遺言によるなるへし、唐にも歳時記に化生の事出たり、其もとゝは女兒のもてあそひものなるを、後には泰山の神にさつけまつりしやう五雜俎に見へたれば、後世其もとを忘るゝ事、和漢往々おなしかるへし。



丙午紀行

丙午紀行附録

(東海道名所古跡略記)

終

丙午紀行の終りに

丙午紀行二卷並に附録一卷は、予が王父桃園先生の著書の一つとして家に藏するところなり、頃者事を以て、これを剗刷上梓し、乃祖の祭祀に於て、舊門有志に頒呈することとなりぬ。書肆清水書店主葉多野君、多年予と親交あり、同君の業は、主として法律書の刊行にあれども、特に予が行を賛して、之れが出版をうけがわれたり、而かも予當初の考としては、當然これを非賣品たらしむる積りなりしに、同君は讀むく、當時の世態現時に對して、餘りに珍らしければ、一部分公刊してはとの勸説をうけぬ、現代には全く没交渉のものにして、而かも著者その人は、何等之等の後圖なしに書きつらねたる平明觀察の一記述に過ぎざれば、之を公刊せんも烏滸がましく、又無益なるべきこととして辭退したれ



ども、同好の士もあるべし、一部爾かしてはとのことより、意を決して半ば公刊のこととなせるなり。唯だ予として面白く感ずるは、巻頭掲げたる今を距る百有餘年前の驛傳地圖なり、こは予が先年廣島在任の折市井に於て偶然發見したるものなり、先輩にして畏友たる吉野法學博士の配慮によつて、斯界の泰斗たる山崎理學博士の題言を得るに至り、更に又這般黑板文學博士の題叙を得るに至りしは、この地圖に對して無限の光榮を附するのみならず、著者が廣島にその足跡を印したりしことを偲び、又或は當時この種地圖を携帯して遊歴せしにはあらざりしかを追懷して、感興特に深きを覺ゆるなり。

表箋文字及び巻頭題圖は、共に彼の有名なる古籀篇一百卷の大成によりて、帝國學士院賞を受けたる、鴻儒竹山高田忠周先生の

筆に爲れるもの、葉多野君の出版に關する配慮と共に、併せて深く感謝せざるべからざるなり。若しそれ書中往々にして○字を以て埋め、文章前後の照應を缺くは、此書數十年篋底に藏して紙蟲の害をうけ、文字の讀過明瞭ならざりしに因る、その他著者の引證俚俗に陥り、不正確のところ多からん、而かも本書の目的は、別に史的考證の適確を期したるにあらずして、唯著者見聞の叙情にあり、讀者深くこれを咎められざらんことを、又而して校者の閱訂、俗身常に匆忙寸暇なき時に於て、半夜の一燈に、僅かの間を偷みてこれを試みたり、豈に多く魯魚の誤りとのみ云はんや、刷成隨所の過誤は切に大方の寛恕を仰ぐと爾云。

大正壬戌十一年春三月

東京目白臺の僑居に於て

校者謹識



西  
午  
糸  
行

四

大正十一年四月二十五日印刷  
大正十一年五月二十五日發行

定價金三圓

不 許  
復 製

著 者 佐 藤 脩 亮

東京市小石川區雜司ヶ谷町百十二番地

發 行 者 瀧 澤 一 郎

東京市京橋區西紺屋町二十七番地

印 刷 者 株 式 英 舍

東京市京橋區西紺屋町二十七番地

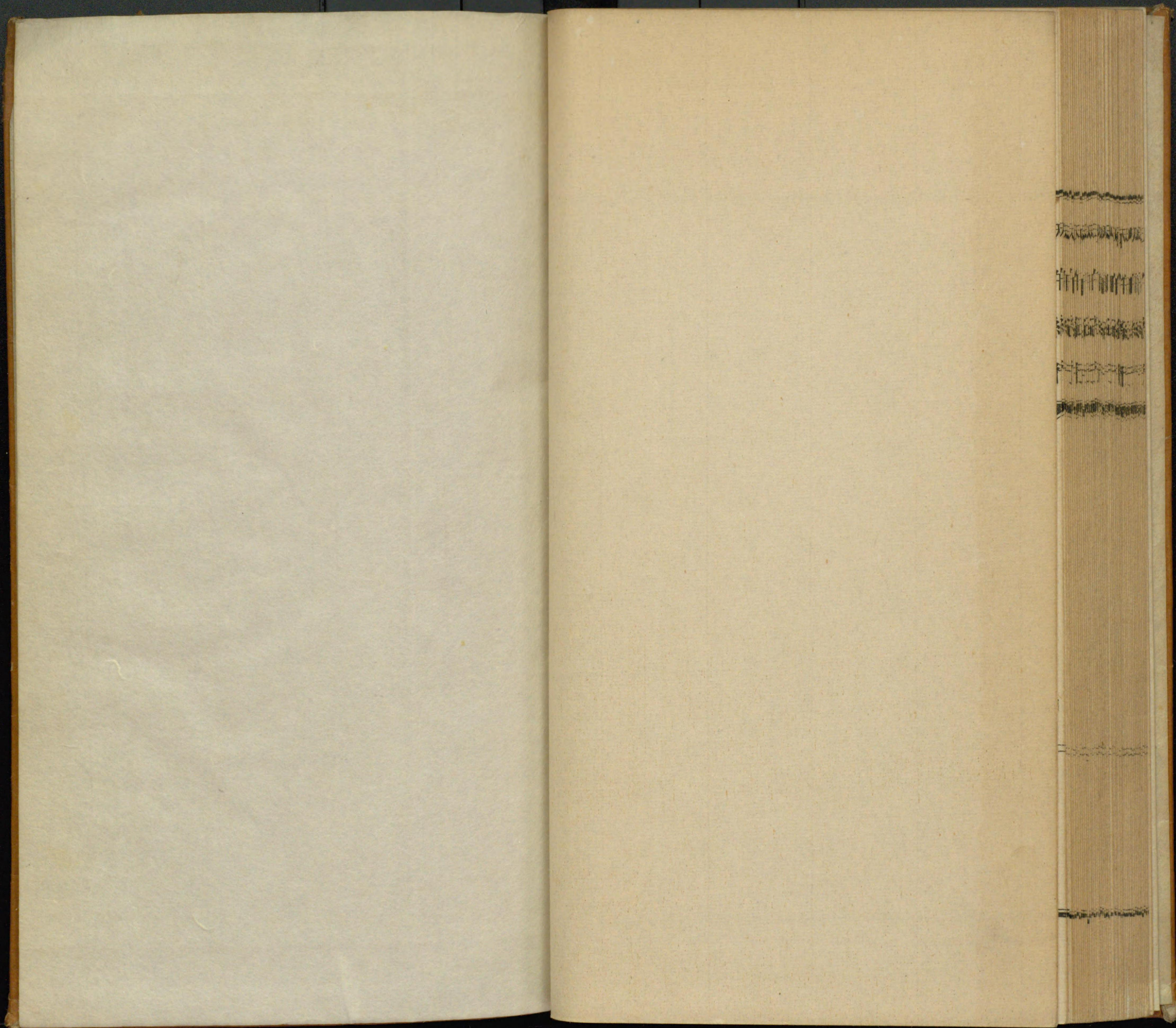
東京市神田區今川小路二丁目四番地

發 賣 所

清 水 書 店

電話九段五七七番五七八番  
振替貯金口座東京七四四七番







160  
94

Handwritten text on the right edge of the right page, possibly bleed-through from the reverse side. The text is arranged in several horizontal lines and is mostly illegible due to fading and the angle of the page.



